

深澤義太夫一代記 池のクジラ

ここ、大村の地ではクジラ漁が盛んでした。クジラ一頭捕まえるだけでいくつもの村が食うに困らなかったそうでございます。

また、捨てる場所が無いのもくじらのいいところで、食べるだけでなく、ひげや歯は装飾品に、毛は網に、皮や骨からは油を抽出していたそうです。この油、田んぼにまくと害虫駆除に役立つ天然の農薬代わりになったそうでございます。このクジラ漁で財をなしたのが深澤義太夫という人物。何代にもわたりクジラで栄華を極めたそうです。そんな義太夫が親分と呼ばれていた頃のお話です。

「親分から呼び出しだよ。

「親分から？誰かしくじったんじゃねえか？誰だろうね。

「みんな来いってさ

「全員？

「おーい。みんな集まってくれ。親分からの呼び出しだ。最近、クジラが取れてねえ。多分、その事だと思ふんだ。遊びじゃねえからな。心してかかるんだぞ。わかったな。

「みんなすまねえな。休んでる所。

「いえ、親分、なんでございましょう。

「今日集まってもらったのは他じゃねえ。最近、クジラがあまり取れてねえんだ。各組の状況を把握しておこうと思つてな。竜、お前の所はどうだ？

「えい。親分、先月は1頭でございます。

「そうか。熊、お前の所は

「えい。面目ねえ。5頭です

「十分じゃねえか。何が面目ねえんだ。

「追いかけましたが逃げられました。五島列島までの五島です。

「じゃ取れてねえんじゃねえか。どこまで行ったかは聞いてねえんだ。お前の所は

「家族のクジラを見つけまして。まとめて捕まえようと

「一網打尽ってやつだ。

「まずは子供に逃げられまして、

「すばしっこいから仕方ねえ。

「次はおっかあに逃げられまして。

「知恵があるからな。

「さいごに逃げられたのが

「逃げられたなら取れてねえだろ

「いえ、逃げられたのはおっとう。

「ばかやろう。何頭捕まえたかきいてんだ。そっちは

「やたら目立つくじらがいましてね。あの辺りでは有名なんですよ。

「うん。何頭捕まえたんだ？

「とにかく目立つからみんな集まってくるんですよ。

「そんな集まるならいくらでも捕まえられるだろ。

「それがなかなか捕まらねえ。
「ねらったけど捕まらねえ一頭もとれてねえだろ
「いえ、ねらったのは広告塔
「何が広告塔だ。そっちはどうだ？
「えい。立派なくじらでしたよ。このあたりじゃ3本の指に入るくじらです。三英傑って言われてます。
「ほう。大物に挑んだな。
「大名でいえば、信長、秀吉、家康ってなもんです。
「もう少し小物を狙えばいいだろう。
「こっちを殺してしまえって感じのクジラには逃げられました。
「信長型だな。仕方ねえ。
「にげきってみせようってクジラにも逃げられました。
「秀吉型だな。
「最後に残ったやつにも逃げられました。
「一頭も捕まえてねえだろ
「いえ、家康ですから、鳴くまで待とう
「馬鹿なこと言ってるんじゃないかねえ。なんだってこんなに捕まらねえんだ。
「海が暖かくなってきたんです。
「温暖化ってやつか
「いえ。温かいから眠くなる。
「気合い入れて働け。なんでクジラが捕れねえんだ？
「餌が少なくなってるんじゃないかねえかと
「くじらのか？
「いえ、働くあつしたちの。
「働かねえのに飯ばかり食いやがって。
「お殿様からも期待をかけてもらってるんだ。野郎どももしっかり働け。

翌日お殿様に呼び出されまして

「義太夫、表を上げい。
「は、はは。
「その方、くじら漁は順調であるか？
「それが、そのなかなか
「うまく行っておらんのか。
「恥ずかしながら。
「遠路はるばる江戸の地から祈祷師が来ておる、その方につけよう。よく相談の上

今でいう所の海洋学者でございます。海流の流れを観察して、クジラが通る水の道を調べる。これによって、またクジラを捕まえられるようになる。

「義太夫、表を上げい。漁は順調であるか？
「おかげさまで。

「一つ頼みがある。その力をもって、海だけでなく陸の平穩も成し遂げてもらいたい。河川の氾濫である。大水により城の堀が削り取られた。このままでは城も流されかねん。任せたぞ。

これから深澤義太夫、溜池の工事も着手いたします。無事に溜池が完成すると河川の氾濫も治まりまして。

「義太夫、よくやった。これで我が玖島城も流されずにすむ。

「一つ聞いてもよろしいですか？ なぜ私に溜池の工事を？

「ん？その方、くじら漁はが生業ではないのか？

「そうですが。

「では適任だ。どちらもシロナガスである。